

第2章

地域の現況と課題



1 市民会議



計画を策定するにあたり，市民の皆さんの率直な意見をいただく場として，平成17年10月に「芦屋市地域福祉市民会議」を設置しました。市民会議は，6名の公募委員，福祉団体の代表や福祉関係者，自治会，老人クラブ連合会，コムスク，子ども会の関係者，民生委員・児童委員，日頃から地域福祉にかかわるボランティアグループ・NPOなどからの市民委員が参加し，市民主体のワークショップ形式で計6回の会議を経て，「芦屋をよりよいまちにするための優先課題と方策」をまとめました。会議では，何よりも地域住民の視点を大切に参加者主体で論議を深めました。生活者として，普段考えていること，自分たちのまちに対する思い，行政に対して思っていること等々を，様々な立場の人が集まり，互いの立場を認め合いながら，率直に考え，市民意見をまとめました。また会議には，学識経験者，市の職員もオブザーバーとして参加しました。

開催経過

	日 時	場 所
第1回	平成17年10月23日（日）午後1時～4時半	市役所分庁舎大会議室
第2回	平成17年11月15日（火）午後1時～4時	市役所分庁舎大会議室
第3回	平成18年 1月12日（木）午後1時～4時半	市役所分庁舎大会議室
第4回	平成18年 1月25日（水）午後1時～4時半	市民センター 301 室
第5回	平成18年 2月 3日（金）午後1時～4時半	市役所南館 4 階大会議室
第6回	平成18年 2月21日（火）午後1時～4時	市役所分庁舎大会議室

※ 3月23日（木）には，市民委員有志の参加による研修会を実施しました。

検討のプロセス

市民会議では、「芦屋市をよりよいまちにするための課題」について意見を出し合った結果、以下の11の課題に整理することができました。

- 課題 1. 地域づくりに対する市民意識を向上させ、活動実践者の発掘・育成をする
- 課題 2. 生活弱者が暮らしやすいまちづくりを進める
- 課題 3. 総合福祉センター等、活動や交流の拠点をつくる
- 課題 4. 住民と行政が協力してまちづくりに取り組める仕組みをつくる
- 課題 5. 自治会、コミスク、老人クラブ等、地域のグループや団体の横のネットワークをつくる
- 課題 6. 行政職員の資質を向上させる
- 課題 7. 気軽に参加できる地域のコミュニケーションの場をつくる
- 課題 8. 活動の担い手や参加者の固定化を解消する
- 課題 9. 声掛け、あいさつから始まる近所づき合いを深める
- 課題 10. 自治会組織の充実・連携を図る
- 課題 11. みんなが気軽に交流できる機会や、そのための情報を充実させる



まちの課題解決のための方策

市民会議では、前述の課題1から課題5についてを優先課題とし、解決のための方策を検討しました。その結果、以下のような方策が提言されました。

なお、課題解決のための方策は、「個人や家庭で取り組むこと」「地域で取り組むこと」「行政で取り組むこと」に分類してまとめています。

課題1. 地域づくりに対する市民意識を向上させ、活動実践者の発掘・育成をする

(個人・家庭では)

- 地域の情報交換連絡会をつくり、運営していく。
- 情報掲示板の管理・情報のコーディネートをする。

(地域では)

- 中学校区、できれば小学校区で、情報交換をする場所をつくり、コーディネーターを置く。情報発信、交流をする。

(行政では)

- 地域の情報交換連絡会を開催するための場を提供する。
- ボランティアグループだけでなく、NPOや個人の情報を掲示する掲示板の設置を商店、生協などと交渉する。



課題 2. 生活弱者が暮らしやすいまちづくりを進める

—インクルージョン*のまち・あしや宣言をする—

*ここでのインクルージョンとは、高齢になっても障がいがあっても外国人であってても所得が低くても、必要なサポートによりどんな立場の人も含めて包み込むという意味に使っています。

(個人・家庭では)

- 宣言ステッカーを家や自家用車に張る。
- 家庭の中で福祉を話題にする。

(地域では)

- ステッカーの普及（配布）に社協，自治会，福祉団体なども参加する。
- 福祉についての知識普及のため，シンポジウムや講演会を積極的に行う。
- 中学生の体験学習「トライやるウィーク」で福祉の現場をよく見てもらう。

(行政では)

- 障がいのある人も高齢者，外国人もみんなが住みやすいまちづくりを目指して「インクルージョンのまち・あしや」宣言を全国に先がけてする。
- 宣言をブランド化するためにかっこいいステッカー（マーク）をつくる。
- ステッカーを広報紙に掲載，公用車に貼り，市民の目につくようにする。

課題3. 総合福祉センター等，活動や交流の拠点をつくる

（個人・家庭では）

○たとえばあし湯等，知られていない交流の場をクチコミでもっと周知する。

（地域では）

- 総合福祉センターの必要性を，関係者レベルから市民の要望にしていく。
- 既存の施設や拠点を有効利用する。若い人たちもそこに子どもを連れて出向いていく。
- 掲示板を活用する。交流の拠点をつくるには利用することが大切。掲示板を見るクセをつけるために啓発していく。

（行政では）

○福祉の総合施設としての拠点づくりを，市の施策の最優先事項にする。



課題 4. 住民と行政が協力してまちづくりに取り組める仕組みをつくる

(個人・家庭では)

- 市民活動にかかわる人は、
無理をしない、自分ができることをできる時に、情報を共有する、
何がしたいか、何ができるかを考える。
- 市民活動のリーダーは、
メンバーを甘やかしすぎない、
役員の世代交代を図る、
一人で抱え込まずに任せる。

(地域では)

- プライバシーや個人情報保護についてみんなで考え直す。

(行政では)

- 行政職員の専門知識に個人差があるので福祉・人権等の職員研修を行う。
- 行政システムや部署を、市民に分かりやすく整理する。
- 住民と行政が同じ視点や意識をもつために、行政職員はボランティア活動を理解し、現場を知るように心がける。

課題5. 自治会、コミスク、老人クラブ等、地域のグループや団体の横のネットワークをつくる

(個人・家庭では)

○笑顔であいさつする。

ご近所づき合いを大切にして地域とつながりをもつ。

(地域では)

○地域で行事を開催することによって、まず顔の見える関係づくりをする。

花見、夏祭り、もちつき等、各種団体一つになってネットワークづくりの第一歩を始める。

(行政では)

○スクラップ&ビルド

行政組織を整理して、(縦割りでなく)地域とのつながりを一本化する。



市民会議でまちの課題を出し合い、11の課題に整理しました。この11の課題について、順位付けのための投票を行い、上位5つの課題を優先課題とし、それぞれ「個人・家庭でとりくむこと」「地域でとりくむこと」「行政でとりくむこと」にまとめました。

よりよいまちにするための方策

?地域福祉市民会議第5回会議まとめ?

33 プロジェクト 地域づくりに対する市民意識を向上させ、活動実践者の発掘・育成をする

地域の情報交換ネットワークを運営していく

中学校区、できれば小学校区で情報交換をする場所をつくり、コーナーをおく

地域の情報交換連絡会を開催する

ボランティアグループ、NPOや個人の情報を掲示する

30 プロジェクト 総合福祉センター等、活動や交流の拠点をつくる

たとえあし湯など、知られていない交流の場を口コミでもつと周知する

総合福祉センターの必要性を関係者レベルから市民の要望にしていく

既存の施設や拠点を有効利用する

掲示板を活用する

21 プロジェクト 住民と行政が協力してまちづくりに取り組める仕組みをつくる

プライバシーや個人情報保護についてみんなで考え直す

行政職員の専門知識に個人差がある

行政システムや部署を、市民にわかりやすく整理する

住民と行政が同じ視点や意識をもつために行政職員は、ボランティア活動を理解し、現場を知ろう心がける

32 プロジェクト 生活弱者が暮らしやすいまちづくりを進める

言ステッカーを家や自家用車にはる

ステッカーの普及(配布)に社協、自治会、福祉団体なども参加する

障がい児者も高齢者、外国人もみんなが住みやすいまちづくりをめざして「インクルージョンのまち・あしや」宣言を全国に先がけてする

インクルージョンのまち・あしや宣言をする

(インクルージョンとは「包み込むこと」という意味の英語)

家庭の中で福祉を話題にする

福祉についての知識普及のため、シンポジウムや講演会を積極的に行う

中学生の職場体験「トライヤーク」で、福祉の現場をよく見てもらう

14 プロジェクト 自治会、コミスク、老人クラブ等、地域のグループや団体の横のネットワークをつくる

笑顔であいさつをする

地域で行事を開く

スクラップ&ビルド

個人・家庭で地域で行政でとりくむこと

宣言をブランド化する

ステッカー(マーク)を広報紙に掲載したり、公用車にはり、市民が目につくようにする



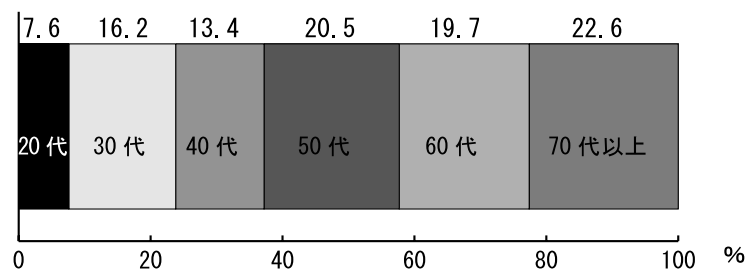
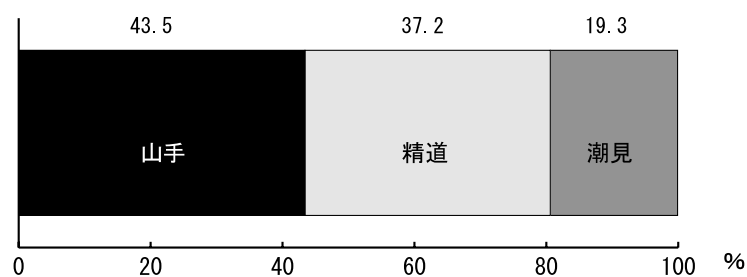
2 市民意識調査



平成18年8月に、「地域福祉に関する市民意識調査」を実施しました。調査は、無作為抽出の市内在住2500人に対し調査票を郵送、973件を回収、転居先不明等の返送分16件を除く回収率は約39.2%で、うち有効調査票は951件でした。調査結果の概要は、以下のとおりです。なお、単数回答の質問については、無回答の数が多いものについてを除いて、基本的に有効パーセントを使用しています。合計パーセントが100%を超えるものは、複数回答の質問です。

回答者の属性

地域別では、中学校区別の人口比に近いバランスでの回答が得られました。男女別に見ると、男性32.2%、女性67.8%と女性の回答率が圧倒的に高く、年齢別では、50代以上の回答率が高くなっています。住まいの形態は、持ち家が78.8%で、震災前から芦屋に居住している人は、48.0%と半数を割っています。家族構成は、一人暮らしまたは夫婦のみの世帯が約半数で、18歳未満の子どもがいる世帯は20.3%となっています。

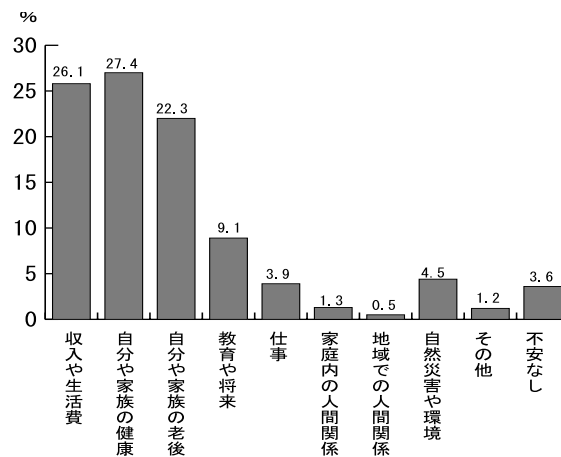


日常生活での不安について

「あなたが日常の生活でどのような不安を感じておられるか、不安の度合いの大きいものから順番に3つ以内でお答えください」の質問に対し、

一番不安に思うことは、「自分や家族の健康」27.4%、「収入や生活費」26.1%、「自分や家族の老後」22.3%の順でした。

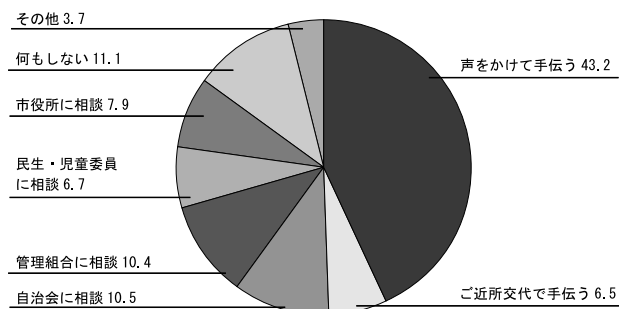
第1番目の不安



地域での助け合いについて

「地域で暮らしていると色々な問題が出てくるとは思いますが、例えばご近所のお一人暮らしの高齢者が、週2回の朝のごみ出しに困っているとき、あなたはどうしますか(回答は1つ)」の質問に対し、

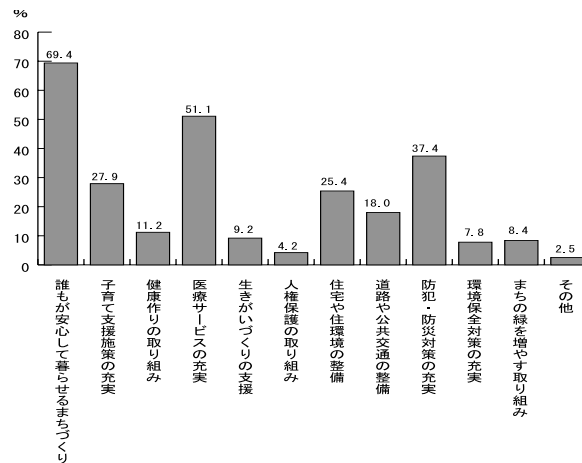
「声を掛けて手伝う」の回答が43.2%、逆に「何もしない」が11.1%。「管理組合に相談」「自治会に相談」「市役所に相談」等を合わせて「どこかに相談する」という回答は35.5%でした。



芦屋市が力を入れて取り組むべきこと

「日頃の生活の中で、ふだんの暮らしをよりよくするために芦屋市が力を入れて取り組むべきだと、あなたがお考えのことは何ですか（回答は3つ以内）」の質問について、

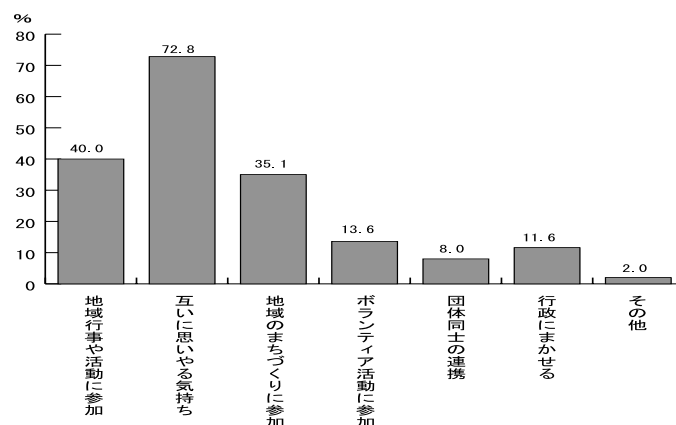
多いものから順に、「高齢になっても障がいがあっても（誰もが）安心して暮らせるまちづくり」を69.4%、「医療サービスの充実」を51.1%、「防犯・防災対策の充実」を37.4%の方が選択しています。



住民自身はどうすればよいか

「住み慣れた地域で暮らし続けるために、住民自身はどうすればよいとお考えですか（回答は3つ以内）」の質問について、

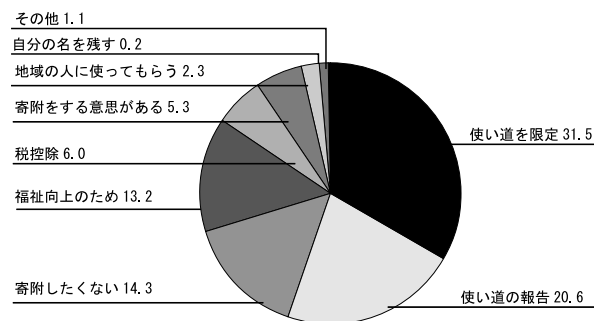
多いものから順に、「互いの生き方を尊重し、地域で孤立する人がないように互いに思いやりの気持ちをもつ」を72.8%、「地域行事や活動に積極的に参加」を40.0%、「行政機関と連携をとりながら、地域のまちづくりに積極的に参加」を35.1%の方が選択しました。また、「行政にまかせる」という回答は11.6%でした。



「寄附」による社会貢献について

「色々な「寄附」による社会貢献について、あなたはどのようにお考えですか（回答は1つ）」の質問に対して、

「使い道を限定」したり、「使い道を報告」すれば寄附してよいとの回答が、合わせて52%を超えました。「寄附したくない」14.3%に、「その他」1.1%、「無回答」5.5%を合わせた20.9%を寄附したくない意向であると考えても、約8割の方がなんらかの形の寄附による社会貢献の意向をもっているとの結果が出ました。

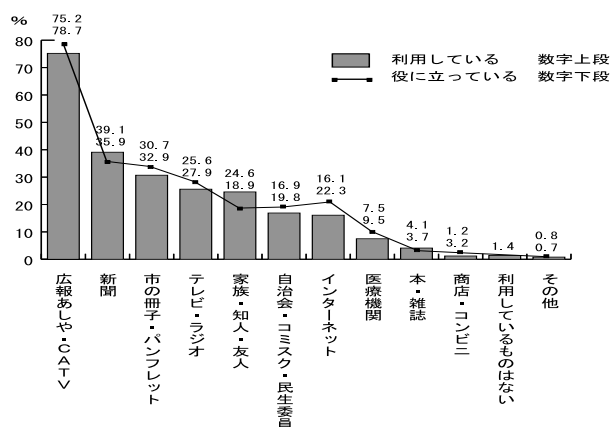


福祉の情報について

「あなたが福祉の情報を得るのに、普段利用しているもの、また役に立つと考えるものは何ですか（回答は3つまで）」の質問に対して、

多いものから順に、「広報あしや・CATV」を75.2%、「新聞」を39.1%、「市の冊子・パンフレット」を30.7%の方が選択し、次いで多いのが、「テレビ・ラジオ」25.6%、「家族や知人のクチコミ」24.6%でした。

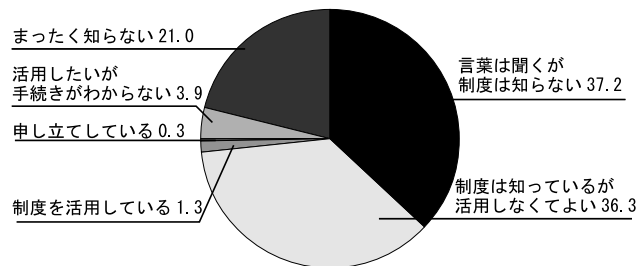
役に立つと思うものも、同じ順位でした。



「成年後見制度」について

「成年後見制度とは、本人が障がいや認知症などで判断能力が十分でない場合、本人に代わって家庭裁判所が決める成年後見人等が財産管理や介護サービス契約などを行うことができる制度ですが、あなたはこの制度について知っていますか（回答は1つ）」の質問に対して、

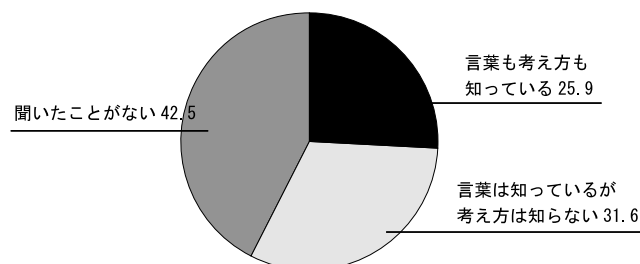
「言葉は聞くが制度は知らない」「まったく知らない」を合わせると、58.2%の方が成年後見制度を知らないという結果となりました。また、「制度は知っているが今のところ活用しなくてよい」が36.3%、「活用している」「手続き中」「活用したいが手続きが分からない」は合わせて6%未満でした。



ユニバーサルデザインについて

「ユニバーサルデザインは、年齢、性別、文化、身体状況など人がもつ様々な個性や違いにかかわらず、誰もが利用しやすいように、まちづくり、ものづくり、仕組みづくりなどを行っていこうとする考え方ですが、あなたはこの言葉や考え方を知っていますか（回答は1つ）」の質問に対して、

「聞いたことがない」42.5%、「言葉は知っているが考え方は知らない」31.6%、「言葉も考え方も知っている」25.9%と、ユニバーサルデザインという概念がまだあまり知られていないことがうかがえます。

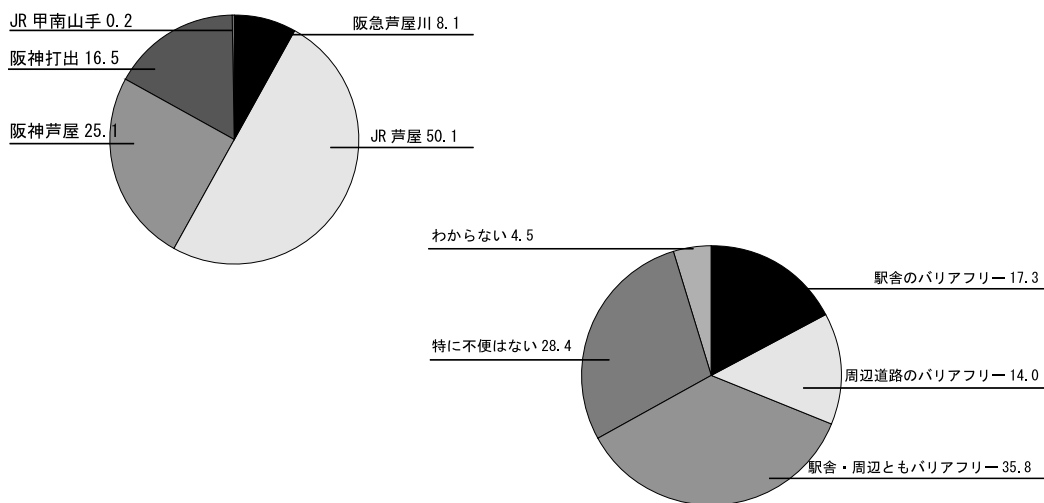


普段最もよく利用する鉄道駅について

JR芦屋駅 50.1%，阪神芦屋駅 25.1%，阪神打出駅 16.5%，阪急芦屋川駅 8.1%の順でした。

また、「最もよく利用する駅舎や駅周辺道路（駅前広場を含む）について、歩きやすさや使いやすさの観点からバリアフリー化をどのようにお感じですか（回答は1つ）」の質問について、

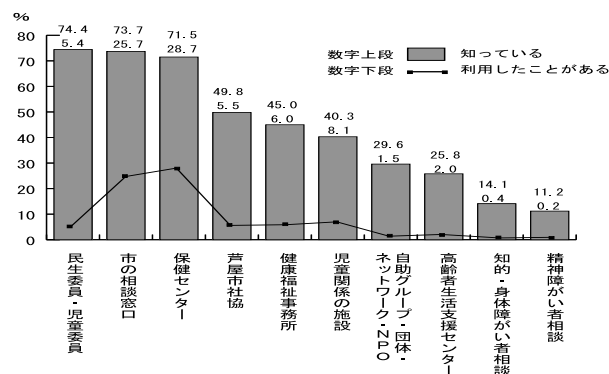
駅舎や駅周辺のバリアフリーについて「特に不便はない」との回答は28.4%で、67%の方が駅舎，周辺道路（または両方）についてバリアフリー化の必要性を感じていることが分かりました。



福祉の相談窓口について

「民生委員・児童委員」「市の相談窓口」「保健センター」については、いずれも70%以上の方が知っていると回答しました。

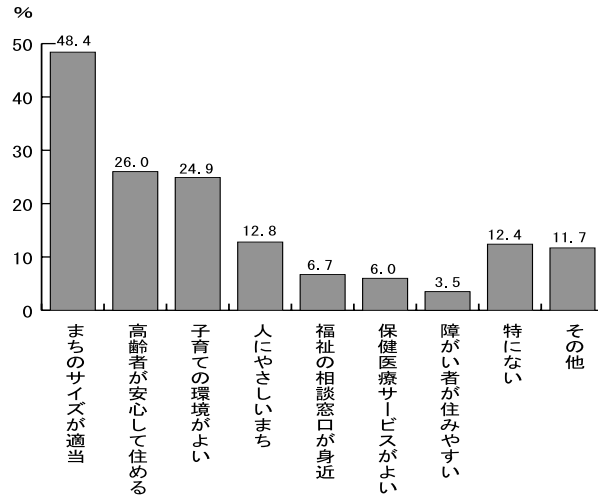
また、利用については、「保健センター」が28.7%、「市の相談窓口」が25.7%の方が利用したことがあると回答しています。



芦屋のよいところだと思うことについて

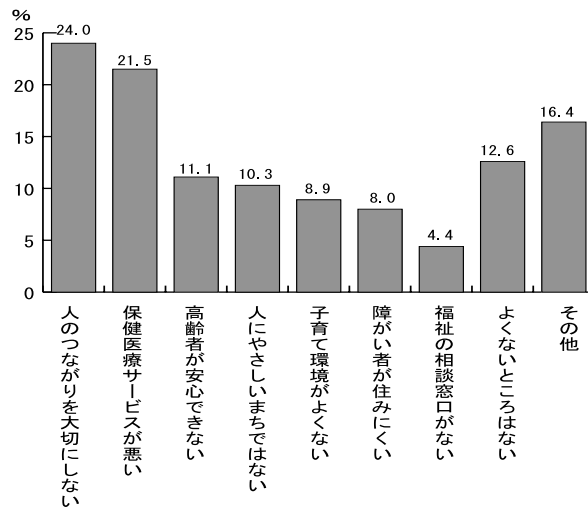
「普段の暮らしの中で、あなたが芦屋のよいところだと思うことは何ですか（複数回答可）」の質問について、

48.4%の方が、「まちのサイズが適当」と回答しています。次に多いのは、「高齢者が安心して住める」26.0%、「子育ての環境がよい」24.9%でした。



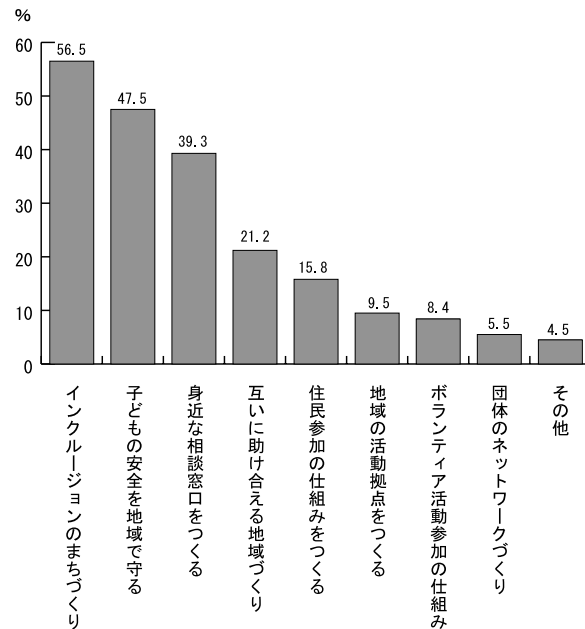
芦屋のまちのよくないと思うことについて

「人のつながりを大切にしない」は24.0%、「保健医療サービスが悪い」は21.5%でしたが、他はほぼ10%程度の回答でした。



今後の芦屋のまちづくりで大切にしていってほしいと思うことについて

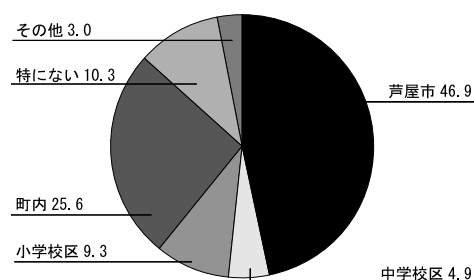
「誰もが住み慣れた地域で暮らしていけるインクルージョンのまちづくり」が56.5%と最も多く、次いで「子どもの安全をみんなで守る地域づくり」47.5%、「身近な相談窓口をつくる」39.3%となりました。



あなたが「自分のまち」と感じる範囲について

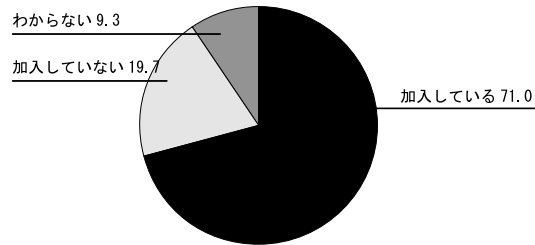
「あなたが「自分のまち」と感じているのはどの範囲ですか。あなたのお気持ちに一番近い答えを1つお選びください」の質問について、

46.9%が「芦屋市」と回答しているが、次は「自分の住む町内」25.6%となっており、町内からいきなり市全体へまち意識が一気にとんでいることがうかがえました。地域コミュニティの横の連携の状況を表しているともいえます。



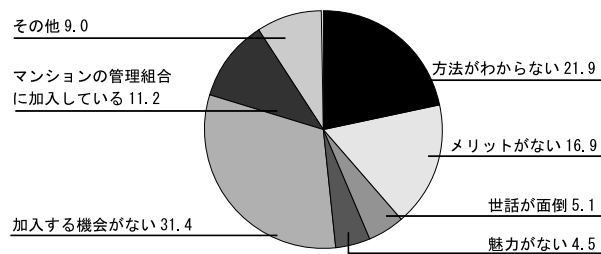
自治会への加入について

「加入している」が71.0%、「加入していない」が19.7%、「加入しているかどうか分からない」も9.3%ありました。



<加入しない理由について>

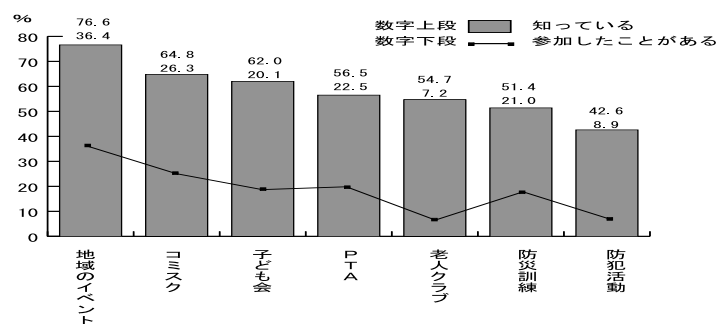
多いものから順に、「加入する機会がない」31.4%、「加入方法がわからない」21.9%、「加入するメリットがない」16.9%となりました。また、「マンションの管理組合に加入しているから」という回答も11.2%ありました。



地域行事や地域活動の認知度と参加について

地域の行事や活動でよく知られているのは、多いものから順に、「秋祭りなどの地域のイベント」76.6%、「コミスク」64.8%、「子ども会」62.0%、「PTA」56.5%、「老人クラブ」54.7%でした。

また、参加したことがあるのは、「秋祭りなど地域のイベント」が36.4%で最も多く、次いで「コミスク」26.3%、「PTA」22.5%となりました。

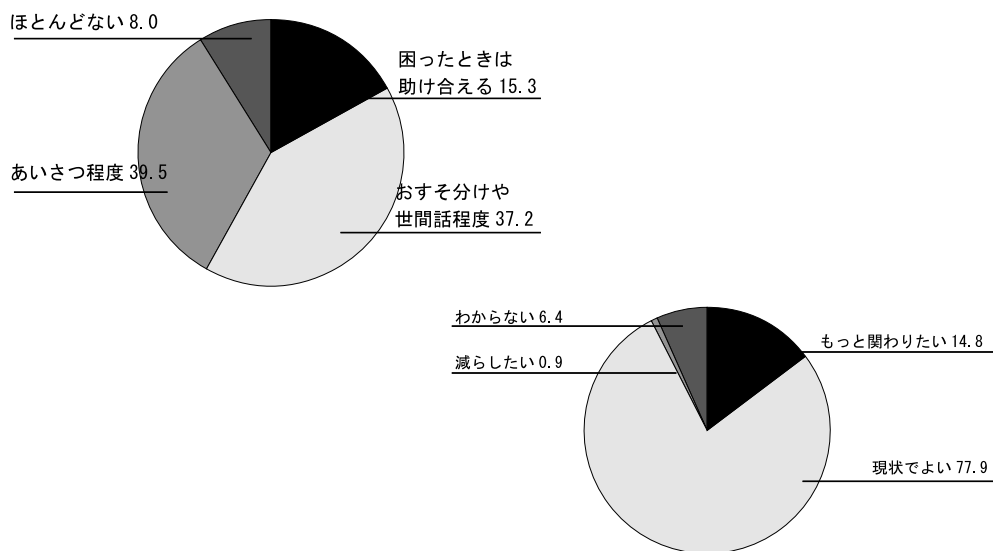


近隣との付き合いの程度について

「あなたは近隣にどの程度のお付き合いの方がいますか（回答は1つ）」の質問について、

「あいさつ程度」が39.5%で最も多く、次いで「おすそ分けや世間話程度」が37.2%、「困った時は助け合える」関係は15.3%でした。

また、77.9%の方が近隣とのつき合いは「現状でよい」と回答しており、「もっとかかわりたい」は14.8%、「減らしたい」人は0.9%でした。

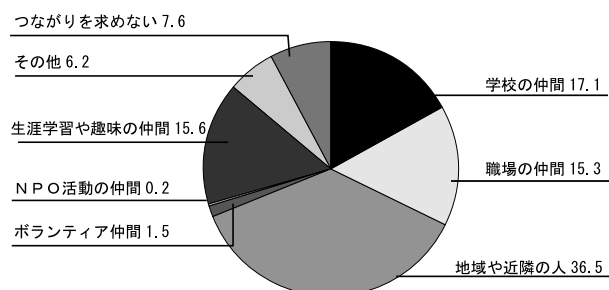


家族以外で最も大切にしている人とのつながりについて

「人とのつながりの中で、あなたは家族以外で誰とのつながりを大切にしますか（最も大切にしているものを1つお答えください）」の質問について、

多いものから順に、「地域や近隣の人」36.5%、「学校の仲間」17.1%、「生涯学習や趣味の仲間」15.6%、「職場の仲間」15.3%となりました。

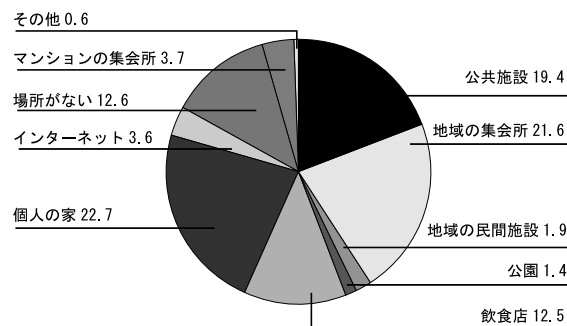
「つながりを求めない」という人は7.6%でした。



集いの場について

「あなたの普段の生活の中で、ちょっと気になることがあったり、ちょっと困ったことが起こったとき誰かと集まって相談できるような場所をもし求めるとすれば、それはどこですか（回答は1つ）」の質問について、

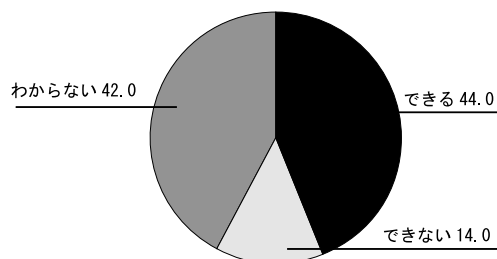
普段の生活の中で、ちょっと気になることがあったり、ちょっと困ったことが起こったとき、誰かと集まって相談できるような場所は、「個人の家」22.7%、「地域の集会所」21.6%、「公共施設」19.4%となり、公的な拠点としては41%でした。



災害時の避難等の手助けについて

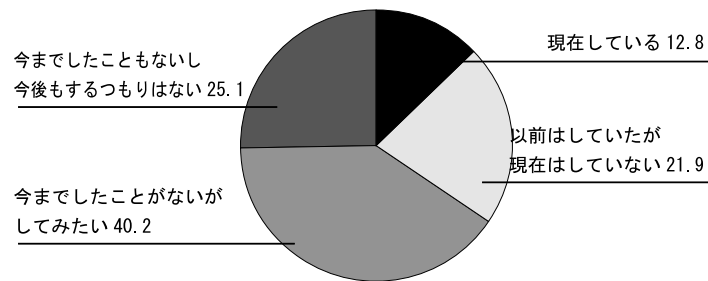
「災害時に避難等の手助けを必要としている方について、あなたは地域の人や自主防災会などの地域組織と協力して避難等の手助けができますか（回答は1つ）」の質問について、

地域の人や自主防災会などの地域組織と協力して避難等の手助けが「できる」と答えた方は44.0%、「わからない」42.0%、「できない」14.0%となりました。具体的な仕組みや方法があれば、多くの人が何かの手助けができる可能性を示しています。



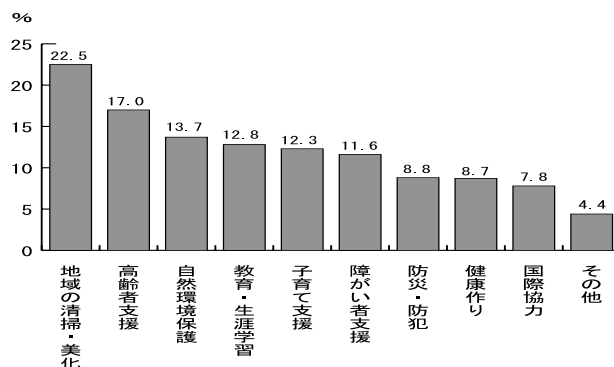
ボランティア活動の経験について

「今までしたことがないが今後してみたい」が最も多く40.2%、「今後もしないつもりはない」が25.1%、「以前はしていたが、現在はしていない」21.9%、「現在している」は12.8%でした。「今後してみたい」の回答は、年齢別では30代が最も高くなっています。



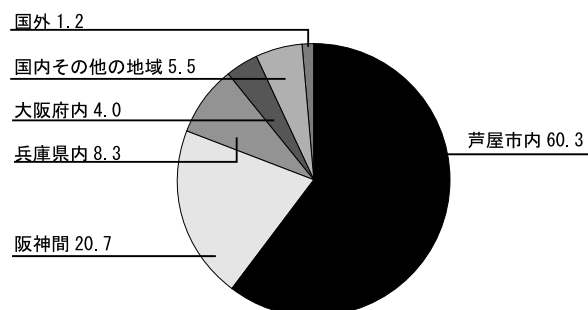
<活動分野>

活動している人、今後したい人の分野内容は、多いものから「地域の清掃・美化」「高齢者支援」、次いで「自然環境保護」「教育・生涯学習」「子育て支援」「障がいのある人の支援」となりました。



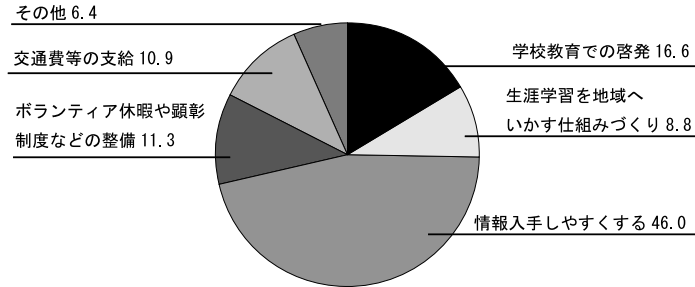
<活動場所>

60.3%が芦屋市内での活動で、次いで阪神間が20.7%となり、身近な地域で活動している人が多いことがわかります。



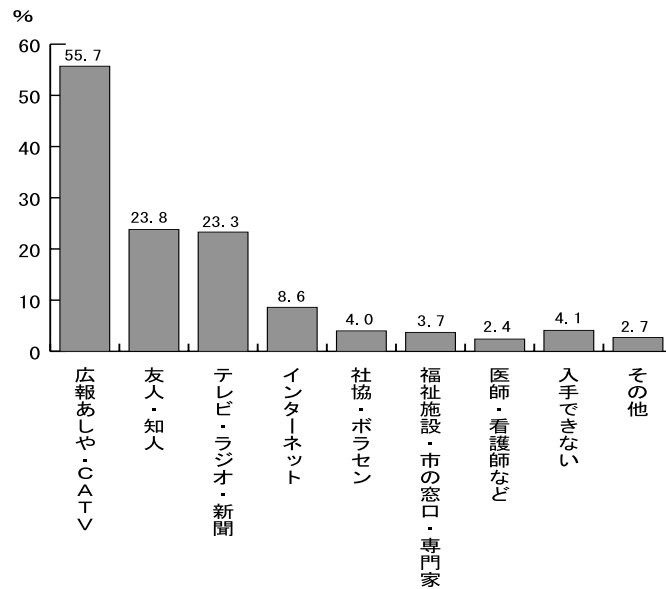
ボランティア活動が活発になる条件について

「情報入手しやすくする」が46.0%で最も多く、「学校教育での啓発」16.6%が続きました。



ボランティア活動に関する情報の入手

「広報あしや・CATV」が55.7%、「友人知人」が23.8%、「テレビ・ラジオ・新聞」が23.3%で、公的情報、マスメディア、クチコミの3つが有力な情報入手の方法になっている実情がうかがえます。「入手できない」の回答も4.1%あり、情報入手のための環境がまだ十分に整っていないこともうかがえます。



NPO法人（特定非営利活動法人）について

「自分は参加も支援もしないが、必要だ」38.4%、「必要だから行政は支援すべきだ」15.5%を合わせると、過半数が「必要」と回答しています。

NPOに「参加している」「いつかは参加してみたい」が合わせて14.3%ある一方、「必要と思わない」は4.6%、「よくわからない」という人も27.2%あり、NPOがまだよく理解されていない現状もうかがえます。

